

黄 山 谷

—その四川流謫時代について—

大 橋 靖

流罪に遭遇した場合、唐人は嘆いてばかりいるけれども、宋人は逆境に強く、流された土地であってもそれなりに楽しく過ごすのが特徴であると言われる。北宋の詩人黄庭堅（一〇四五—一一〇五）字を魯直、号を山谷という。以下、山谷と称する。）の場合にはいったいどのようなのであったのか。その四川流謫時代について考察したい。

紹聖元（一一〇九四）年十二月、新・旧法党の争いの中で、山谷の黔州への流罪が決定した。時にかれは開封府界に居住を命ぜられていた。かれが首都開封を出発してから黔州に至るまでの間にどのような行程をたどったかを記録した詩文はわずかに数篇を存するのみである。これはのちにかれが宜州に流された時には旅の途中のあちこちで詩が詠まれているのと少し様相が異なる。黔州に至るまでの様子を伝えるかれの文章のひとつである「黔南道中行記」を見ると、罪を背負って流されていく人物のものであることを全く感じさせないばかりか、むしろその風景を積極的に楽しんでいるとさえ感じられるのである。

ところが、黔州到着直前に作られた詩である「竹枝詞」二首になると、かれの感情は微妙に変化してくる。

竹枝詞二首 其の一

撐崖拄谷蝮蛇愁 崖に撐え谷に拄え蝮蛇愁う

入箐攀天猿掉頭 箐に入り天に攀り猿頭を掉う

鬼門関外莫言遠 鬼門関外遠しと言ふ莫れ

五十三駅是皇州 五十三駅是れ皇州

この詩は表面ではまだ天子の権力の及ぶ範囲であるといふ強さを見せてはいるが、内心では配所に近づくにつれて不安にさいなまれ、自分自身を励まさずにはいられないのである。そのことは、この「竹枝詞」二首について作られたつぎの詩によって明らかである。

予既に竹枝詞を作り夜歌羅^よ駅に宿る。夢に李白に山間に相見ゆ。曰く、予往に夜郎に謫せられ此に於て杜鵑を聞き、竹枝詞三疊を作る。世之を伝うるや不やと。予細に集中を憶うに有る無し。三誦せんことを請いて乃ち之を得たり。

其の二

竹竿坡面蛇倒退 竹竿坡面の蛇倒退

摩围山腰胡孫愁 摩围山腰の胡孫愁

杜鵑無血可統淚 杜鵑血の涙に続く可き無し

何日金鷄赦九州 何の日にか金鷄九州に赦されん

この詩からは山谷が流刑の地に近づくにつれて赦されて帰りたいという思いをつのらせていたことが伺い知れよう。この詩は夢の中で李白に出会い、李白から伝達されたという形式を取っているが、もちろん山谷の作品である。当時は監視機構が非常に発達しており、不用意な発言は命をも失いかねないという状況であった。流罪の身である山谷は、李白の言葉を借りることによって監視の目を逃れ、安全かつ率直に自らの心情を吐露することができたと考えられる。

さて、黔州到着以降、戎州安置に移されるまでのおよそ三年間

に山谷の作った詩は二〇首余が現在に伝わっている。年ごとに見ると、紹聖二年には兄の大臨が黔州を離れるときに贈ったものが一首あるのみである。翌年には弟の叔達が家族と山谷の長男の相そしてその母を連れて黔州にやってきたが、この年に残した詩も一首のみである。

この時期、山谷の詩はなぜこのように少ないのであろうか。その理由の第一は先ほど述べたように、流謫の身である山谷は不意な発言ができないということである。また、他人との交際自体が制限されていたであらうことも関係していると考えられる。さらには流罪にあったショックが大きかったということもあるだろう。のちに流罪を赦されてからの詩に「荒に投ぜられて万死し鬢毛斑たり。生きて入る瞿塘、灩澦関。」とあり、黔州へ流され、死をも覚悟した山谷の心理が想像できよう。

黔州に到着してからの二年間にはあわせて二首の詩しか作らなかった山谷であるが、翌紹聖四年には十八首と急に増えている。これには楊明叔という人物が関与しているようである。楊明叔は眉州丹稜の人で諱を皓といった。当時黔州の役人であったということが、詳細は不明である。楊皓は山谷に師事して詩を学んでいたと思われる。山谷の詩の題名に「楊明叔に詩を恵ます。格律詩意、皆薰沐して其の旧習を去る。予之が為に喜びて寐ねず。」とあり、このような辺境の地で文学を理解するものがいたということに対する山谷の喜びが伝わってくる。この楊皓との出会いからのち、山谷が作った詩の数が増えているのである。つぎに楊皓に次韻した詩をあげる。

楊明叔に次韻す四首 其の一

魚去游濠上 魚去きて濠上に遊ぶ

鵲来止坐隅 鵲来たつて坐隅に止まる

吉凶唯我在 吉凶唯我在り

憂樂与生俱 憂樂生と俱なる

決定不是物 決定すれば是物ならず

方名大丈夫 方に大丈夫と名づく

今觀由也果 今觀る由も果なるを

老子欲乘桴 老子桴に乘らんと欲す

この詩を見れば山谷のものの考え方がわかるだろう。吉凶禍福というものは生きているかぎりついてまわるけれども、それを悪いと考えるか良いと考えるかという価値判断は自分自身に委ねられているのである。楊皓との出会いののち、山谷はこのようにことに気が付き、以後の流謫地での生活をこうした認識のもとに送ったと考えられよう。

山谷が唐の詩人である白居易の詩から摘句して作った「謫居黔南十首」にも同様の考え方が見受けられる。

黔南に謫居す十首 其の五

宜懷齊遠近 宜しく懷うべし遠近を齊しくし

委順隨南北 順に委せて南北に隨う

歸去誠可憐 歸去すれば誠に怜れむべきも

天涯住亦得 天涯住むこと亦得たり

其の六

老色日上面 老色日び面に上り

歡悵日去心 歡悵日び心を去る

今既不如昔 今既に昔に如かずんば

後当不如今 後当に今に如かざるべし

これらの詩では、今自分が置かれている境遇を楽しもうとする

考えが読み取れる。これは白居易の詩のタイトルで言えば《委順》である。この考え方と、先ほど述べた楊皓と山谷が出会ったとき以来の考え方とは相通するものであるといえよう。

最初に述べたように、流罪に遭遇しても宋人は逆境に強いと言われる。しかし、黄山谷が黔州に流された直後の状態を思えば、かれにそれを当てはめることには無理があるだろう。山谷の場合には、流罪に遭遇してから委順という考え方を身につけ、その結果、逆境に立ち向かう能力を身につけていったとするほうがよいと考えるのである。